愛知・清洲（きよす）城下町遺跡

1 所在地　愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間　一九八七年（昭62）四月～一九八八年三月

3 発掘機関　㈶愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者　細野正俊・水谷朋和・佐藤公保・鈴木正貴・中野良法・飴谷一

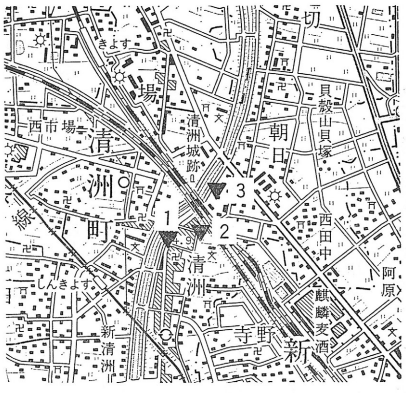
5 遺跡の種類　城郭・都市跡・集落跡

6 遺跡の年代　古墳時代後期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

清洲城下町遺跡は濃尾平野を流れる五条川の自然堤防及び後背湿地上に位置する。発掘調査は一九八一年度から継続的に行われ、一九八七年度は一四ヵ所の調査区で、合計八〇〇〇㎡実施した。

遺跡は、清須城が存続した時期だけでなく、古墳時代後期から江戸時代までに及び、五期に大別できる。



（名古屋北部）

木簡類は清須城に関連する一六世紀代の遺構から出土した。また、平安時代後期の掘立柱建物が廃絶した際に投棄されたとみられる墨書灰釉陶器が数十点出土している。

一　六二C調査区

五条川河川改修にともなう事前調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間に位置し、清須城に関連する遺構は、約一mに及ぶ大規模な整地層を境に二期に区分できる。前期（一六世紀前半）では、五条川旧河道とみられる自然流路NR〇一が存在し、そこから木簡類が出土した。後期（一六世紀末）では、溝・井戸等が存在し、溝SD〇四から土師器皿・漆椀にともなって木簡類が出土した。

二　六二E調査区

県道新川・清洲線関連の調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間に位置し、L字状に屈曲して平行に走る溝二条を検出した。これは、屋敷地を囲む方形の溝の一部とみられ、一六世紀前半に位置づけられる。木簡類はこの溝と交わるほぼ同時期の溝SD〇三から、瀬戸・美濃産の施釉陶器にともなって出土した。

三　六二G調査区

五条川河川改修にともなう事前調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間で、清須城跡の対岸に位置する。ここでは、現在の五条川に直交する形の溝SD〇七・SD〇三と、これを埋めた後に掘削した現五条川に平行して走る溝SD〇一が存在した。木簡類は溝S

D〇七から出土した。

8　木簡の釈文・内容

一　六二C調査区

自然流路NR〇一

(1)・「　卍　南無観世音菩薩　　」
　・「仏法僧　大火所焼時我此土安隠」　416×29×1　061

(2)・「　卍　南無観世音菩薩　　」
　・「仏法僧　大火所焼時我此土安隠」　301×(27)×1　061

(3)・「　卍　南無阿弥陀仏　　」
　・「仏法僧　応無所住　而生其心　敬白」　414×28×1.5　061

(4)・「　卍　南無観世音菩薩　　」
　・「仏法僧　応無所住　而生其心　敬白」　437×31×4　061

溝SD〇四

(5)「𑖨𑖭𑖿𑖨𑖭𑖿□□南無阿弥陀仏□□□　□＝
　＝妙□大□〔實カ〕〔姉カ〕
　乃□□□□　□□□　(414)×25×1　061

(6)「𑖨𑖭𑖿𑖨𑖭𑖿□□南無阿弥陀仏□□□□□□□」　413×25×1.5　061

(7)「𑖨𑖭𑖿𑖨□□〔𑖨カ〕□□□□□□□」　505×39×4　061

いずれも板塔婆である。

二　六二E調査区

溝SD〇三

(1)「百六十□□□□」　103×19×10　011

裏面にも墨痕・墨線が認められるが、文字としては判読できない。

三　六二G調査区

溝SD〇七

(1)𑖨　龍女成仏　普為時□
　人天説法　□□□〔右カ〕□□　(531)×(85)×2　061

板塔婆の断片と見られる。

なお、木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所加藤優氏の全面的な御指導を得た。

9　関係文献

(財)愛知県埋蔵文化財センター『年報　昭和六二年度』(一九八八年)

(鈴木正貴)